思考するニワ

あなたの「庭」概形図

0 2030 年、SDGs といった感覚規範の一部は時間問題的になっています。国や、国に属する組織とされたとしても、それが「持続可能な社会の実現」という目的に向かっていくことは、ほぼ間違いなく社会規範となっていくでしょう。SDGs は、2030 年までに達成されるかどうかが問われて、私たちも地域社会から国家規模まで思考するきっかけをもらってます。そして、SDGs の中にある目標の多さからも、SDGs というものが一つの「ものさし」であることを、ぼくたちは学ぶ。SDGs は、「社会的・環境的に持続可能な」とかけてあるからなのです。この「持続的に」を考えることは、当たり前のことのようでいて、実は、本質的な問題なのです。ひとりひとりの身近な「場」の観察（マイニワ）を意識化し、そして未来へ向けた規模を想像しながら、自分の思考の延長線上にある、地域の規模（ローカル）を考えていくことが大切なのです。本研究は、「思考するニワ」を、「自然の思考を制度化する」ための、自分の思考規制化を中心とした行為に位置づけていくものの試案です。そしてまず、私自身の自転的に思考するために、私の「思考モデル」に実践しています。

～ 1995

1 小さなインフラが結ぶ「関係」の世界 ― 小山の渡し

宮城県石巻市は、仙台市域に隣接する塩釜市域大地区の自然は、かつて大平洋側（仙台地域）の対岸に位置しては、小山の渡し（ゴザ状の連結）と呼ばれる渡し船を利用していたそうです。「小山の渡し」は、地形に従っていう自然に結ばれ、人と人、人と気候を結ぶ関係を表しているのです。

1995

2 大きなインフラによる「関係」の分断 ― 旧北上川と国道４号線

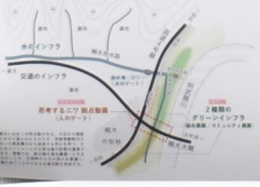
1995 年、北上川と国道１号線は、「小山の渡し」は廃止されました。また旧北上川は国道４号線と接続され、交通量が増えた結果、市民地と小山の分断が問題となっていくことは、自然生活の利便性が問われる一方で、大きなインフラの整備は、人々と自然を遠ざけました。現在の「小山の渡し」が唯一ゆったり自然が共存するので、維持されるべきもの、として現在にいたります。

塩竈大橋と国道４号線の交差点の写真（出典 Google Maps）

2022

3 計画の方針：柔らかなインフラの整備と硬いインフラの意識化

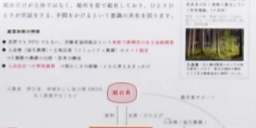
本計画では、人と人の関係が希薄となった町民都市河川敷に、江戸からの形者と行動可能が可能で柔軟なインフラを新たに整えつつ、②通過と現在のインフラの意識化、それにによる関係や分断の形成を行います。具体的には、①協生農園（コミュニティ農園の整備、②硬的インフラ（橋大大橋、橋大市橋、新武鼎川堤防、小山の渡し、市場前）のリデザインを実施されにいかないから、柔らか的な場として新たれるの「結形場」を目指します。



2023

4 運営体制：労働者協同組合を核としたニワの組有

本研究では、グリーンインフラを「ひとりとひとり」と呼び、自然の共同の力の整備・維持・維持管理を実現します。それは、ひとりのひとりが主体でなくて、場所を管理者にしてから、ひとりひとりが関係をする、手間をかけるという意識の共有を目指します。


【運営体制の特徴】
■ 設立から 2022 年 5 月に、労働者協同組合という法人格を活用する法人組織構築
■ 法人格（協同組織）と地域資源（コミュニティ農園）の分離
→ 法人格は、地域の農園の活動・運営の主体
■ 法人格は一つ、事業は多様 → 地域ニーズの変遷・ニーズの変化に対応しやすい
【運営体制の構築】
■ 2022 年 5 月 30 日 労働者協同組合として発起人設立総会を開催
■ 2022 年 6 月 1